

顕浄土真実教行証文類序（四）

高田短期大学学長 栗原 廣海

一、円融至徳の嘉号

ゆえに知んぬ、円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑いを除き証を獲しむる真理なりと。（よつて、この上ない徳をまどかにそなえた名号は、悪を転じて徳に変えなす正しい智慧のはたらきであり、得難い金剛の信心は、疑いを除いてさとりを得させてくださる真理であると知ることができた）

前回は、この一文の訓読に関する問題を最後に論じましたが、今回は文意を尋ねてみたいと思います。

釈尊は、凡夫韋提希が唯一たすかる道、ひい

意味していると考えられます。このような特質・はたらきをもつ「南無阿弥陀仏」の名号は、「悪を転じて徳を成す正智」であると言うのです。

二、分別と無分別

では、「悪を転じて徳を成す」とはどういうことでしょうか。凡夫の身から悪を退治して徳を成就すると言われているのでしょうか。聖人は

『浄土高僧和讃』「曇鸞和尚」に、

無碍光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこおりとけ

すなわち菩提のみずとなる（第十九首）

と言われ、また、

罪障功徳の体となる

こおりとみずのごとくにて

こおりおおきにみずおおし

さわりおおきに徳おおし（第二十首）

では、五逆罪を犯すものや仏の教えを謗るもの、仏になる因を全くもたないものまでもが等しく救われる道として本願念仏の浄土の教えを説かれたわけですが、そのようなすぐれた法である念仏が具体的にどのような特質・はたらきをもって救済を成就するのが、ここに明らかにされているのであると言えるでしょう。

まず念仏がここでは「円融至徳の嘉号」と示されます。「嘉号」とは「南無阿弥陀仏」の名号、つまり念仏のことですが、この名号が「円融至徳」であると言うのです。「円融」について聖人は、『一念多念文意』に、「円融ともうすは、よろずの功徳善根みちみちてかくることなし、自在なるころなり」と言われていますから、「円融至徳」とは、凡夫にははかり知れない仏としての広大で最高の徳が欠けることなく備わり、そのはたらきが何のさまたげもなく自由自在にはたらくことを

と言われています。悪（煩惱・罪障）と徳（菩提・功徳）との関係は、氷と水の関係に等しいと言われるのです。では、悪と徳とが氷と水の関係に等しいとはどういうことなのでしょうか。

それを考えるために、私たちの普段のものの見方について考えてみたいと思います。私たち凡夫のものの見方を「分別」と言います。分別とは、『広辞苑』にも「（もと仏語から）心が外界を思いはかること。理性で物事の善悪・道理を区別してわきまえること」と説明されていますように、主観・客観対立において、客観（外界）を主観に取り込んでものごとの是非・善悪・正邪を区別し、わきまえることですから、独善・ひとりよがりを離れることはできません。ひとつのことがらに対し、凡夫の数だけ分別があり、真実を知ることとはできないのです。

それに対して、仏のものの見方を「無分別」と

言います。無分別について『広辞苑』には「①〔仏〕主体と客体との区別を超え、対象を言葉や概念によつて把握しようとするしないこと。②分別のないこと。前後の考えがないこと。思慮のないこと。へんな若者」と説明されています。私たちは普段、②の意味で理解し、よくない意味で使用していますが、仏教においては①の意味であり、主客の対立を超えて対象と一体となることよつてありのままに受容することができるといふ仏の智慧をあらわしています。この智慧を「無分別智」と言い、「悪を転じて徳を成す正智」の「正智」は、まさにこの「無分別智」のことであると言うことができず。

三、「転ずる」と「分別」

さて、「分別」の世界は、すなわち相対的な世界、世俗の世界です。この世界においては、「悪」と「徳」、「煩惱」と「菩提」、「罪障」と「功德」

は正反対の、対立する概念です。ですから、「徳」「菩提」「功德」のためには、「悪」「煩惱」「罪障」を捨てなければなりません。しかし、真実には、悪（煩惱・罪障）と徳（菩提・功德）の関係は氷と水との関係のようだと言うのです。つまり、氷は固体であり、水は液体ですから、その意味で両者は同じものではありません。氷という固体がなくなつて水という液体になるのです。しかし、水は、氷が溶けることよつて水になるのですから、氷は水の体であり、氷と水は異なるものではないと言わなければなりません。両者は「不二不異」と言うほかありません。悪（煩惱・罪障）と徳（菩提・功德）の関係も同じで、両者は不二でありつつ、悪（煩惱・罪障）は徳（菩提・功德）の体であつて、両者は異なるものではないと言うのです。つまり「不二不異」なのです。このことは、悪（煩惱・罪障）を捨てることよつて徳（菩

提・功德）が成就するのではないことをあらわしています。ではどのようにして成就するのか。円融至徳の嘉号、つまりあらゆる徳を欠けることなくまどかにそなえた「南無阿弥陀仏」の名号が、悪（煩惱・罪障）の氷を溶かして徳（菩提・功德）

できない私ども凡夫のために、「南無阿弥陀仏」という名号となつてあらわれてくださり、弥陀の大悲によつて凡夫の身が「転ぜられる」事態、すなわち「救い」が成就されることを知らそうとしてくださっているのです。

の水にすることよつて成就するのです。そのことが「転ずる」と言われているのです。「転ずる」とは、溶かすことであつて、捨てることではないことに留意しなければなりません。水は、氷が転じて水となる。同様に、徳（菩提・功德）は、悪（煩惱・罪障）が転じて徳（菩提・功德）となるのです。

この「転ずる」という事態は、「分別」によつて把握できる世俗の世界における事態ではなく、

仏の境界、「無分別智」の不可思議の境界における事態であると言わなければなりません。

そこで阿弥陀仏は、「分別」から離れることの

金剛の信樂」とおっしゃっているのです。

そして、この信心において、悪（煩惱・罪障）が徳（菩提・功德）に転ぜられるということを知ることができるといふことを真